

はじめに

この本は、近年われわれが全国の病院で展開している臨床主役型臨床実習の哲学と具体的方法についてまとめたものです。これまでさまざまな実習ガイドが出版されていますが、この本はかなりユニークなものとなっています。闘魂外来の闘魂とは自分自身との闘いであり、実習といえども、臨床現場では自分自身に対してはたゆまぬ監視の眼 (incessant watch) で注視し続ける必要性があります。

この本の内容について簡単に紹介します。まず、『闘魂外来前日の心構え』として、闘魂外来の起源とこれまでの歩み、そして今後の展望を示しました。またこの稿では、医療チームの仲間や患者さんとのコミュニケーションを円滑に行うべきことと、問診と診察におけるアートの重要性についてまとめました。『病歴のとり方』では人間業によるシグナルとノイズの選別に関する考え方方がわかりやすく説明されています。『フィジカル診断』では第七感診察やターゲット診察など、フィジカル診断の歴史を変えるコンセプトとその具体的なとり方が豊富な写真で解説されています。『臨床推論と鑑別診断』では、System 1・2 の説明のあと、めまいのケースを例として具体的な鑑別診断のやり方が展開されています。そこでは、OPQRSTやTOSSなどのチェックリストの使い方についても対話方式で解説され、理解しやすい内容となっています。『エコー検査と画像検査の適応』では、豊富な写真と図表により理解しやすくなっています。実践すぐに応用できるように工夫されています。救急現場すぐに役立つ内容としては、『心肺蘇生』と『多発外傷』についての稿を立てました。患者救命のために必須のスキルについてわかりやすく解説されています。『検体検査の適応と解釈』では、ベイス理論の臨床現場での応用方法についてとてもわかりやすく解説されています。学生の立場からみた教育理論の紹介に加えて、メンターリングについての嬉しい経験談も披露されています。『感染症の診断と治療』では、基本的ロジックに加え、グラム染色法の有用性とそのやり方についてまとめています。『薬物療法』では、薬を制するものは世界を制するという言葉が紹介され、薬の重要さがよく理解できるようになっており、ケーススタディでそれを学ぶことができます。『ケースプレゼンテーション』では、関西弁での記述で楽しく勉強できるように工夫されています。ケースプレゼンテーションをマスターしておくと、研修医になってからとても役に立ちます。外来でのトラブルシューティングのために、大切な『患者や家族への説明とフォローアップ』についての稿を読んでほしいです。効果的に円滑なチーム医療を実践するには、『患者・医療従事者とのコミュニケーション』の稿が役に立ちます。臨床問題についての医学的検索と学習方法については、『論文・医療情報の検索のしかたと読み方』が有用と思います。『学生時代・研修医時代の勉強のしかた』では、正直で大胆な提言が紹介されています。生涯学習のあり方について一石を投じていると思います。また、『初期研修病院の選び方とキャリアプラン』や『初期研修医や専攻医になるときの心構え』についての稿は将来医師として成長していくために大切なことが書かれています。

以上、この本が医学生や研修医の皆様の役に立てば、私たち闘魂外来の著者にとりとても嬉しいことです。

2017年12月

著者を代表して
徳田安春